

第30回教官インタビュー

積極的で

行こう!!

人文学部 稲賀繁美先生

留学冒険談

ヨーロッパの 大学生活

先生はフランス語や比較文化、さらには総合科目の世界の国々の担当だけでなく、人文学部自主公開講座あかてみあ・かみはまのお世話など手広く活動されていますが、専門は美術史、芸術学なのですが、パリに八年も住んで、博士論文なんて書いた「因果」です。フランス政府奨学生となると入居できる大都市というところは人間動物園。夏

には暇だから、エジンバラからウィーンに至るまで、各地の大学寮を渡り歩く。外国語で議論する機会がないと禁断症状になる。

—パリの印象は？

決して能率の良い社会ではない。ストライキなどしょっちゅうで、郵便でも止まる。でも適度に妥協せず、徹底して筋を通す気概があつて、何年も住んでいると、文化の厚みに圧倒される。留学後半は国立図書館に日参して、古文書の発掘作業。あたら青春を



▲インタビューに答えてくださった稲賀先生

日本の学生へ

大学 II 正解のない世界

—帰国子女なんて言葉があるから、かえって無意識のうちに差別、差別が生まれる。三重大には外国人学生もわりと大勢いるのに、日本人学生は見えないふり。これが見えない壁になって留学生を疎外する。先生方も外国人に通用する日本語を磨いてない。今だに外国コンプレックスが文化的非関税障壁になっている。

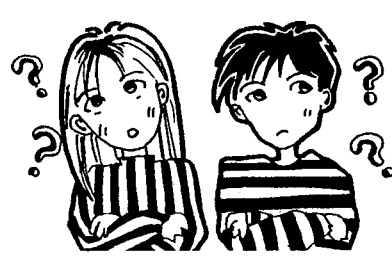
—では、大学で学ぶとは？

大学って、もう出来合いの正解はない世界です。理系だったら、今何が分かってないかが分からないと、何もわからない。文科系でも、政治、外交、訴訟沙汰、どれもみんな自分が正しいと思つて衝突が起きる。去年シカゴでサル

常識が非常識？

—留学とはなんでしょか？

自分の常識を崩す訓練かな言葉ができたって、最初のうちの心理的重圧はたいへん。むりに通訳でもやらされたほうが、後押しがあるから大胆になれる。それを実感したのが最初の世界一周の時で、岐阜県立美術館設立展の出品交渉でした。日本流の贈り物は先方にはすくなく失礼だったりして、もう日本の常識は一切通用しない。でも喉元過ぎると免疫ができる。今の若い諸君はあまりに異文化にたいする精神的免疫がない。十八才まで画一的な教育を受けて、教科書の常識が世界中に通用



—今の日本の大学とは？
日本の大学で困るのは、中ボックスになつてること。予備校までは使命感に溢れているのに、大学に入ったとたんに目標がなくなる。騙されたと思う。思わないのはまじめに勉強してる留学生だけ。でもその驚愕をバネに、大学って何なのか考えて欲しい。自分たちがいかにか恵まれすぎの環境に汚染されているか。そしていかに与えられた機会を



▲インタビューの様子

開かれた感性を

—最後に新入生への言葉を。人の輪・和のなかで何かを造つてゆくこと。私は合気道で四段をいただいでいて、クラブの顧問をしています。自慢でなく「芸は身を助く」。芸事が出来ると外国に行つても友人は出来るし、宿にも困らない。言葉は自然と必要になつて上達するし、鬱病になつて暇もない。家元の出身になれて、その利害も体験できる。

それとクラブの運営。四年続ければ責任感、協調性も養えるから、この体験は貴重。最後に、受け身にならず、自分から求める姿勢。知らない世界へと目を啓く、開かれた感性と感覚を養つて欲しい。「あかてみあ・かみはま」や、留学生との交流をする「異文化を知る会」にも、皆さんの積極的な参加を望んでいます。(工2・和泉真太郎)